先日、Netflix の番組紹介を見ていた際に、不登校の子どもを題材にしたドラマ「タツキ先生は甘すぎる」を知り、第 1 話から第 4 話まで視聴しました。第 5 話はまだ放送されていませんが、非常に考えさせられる内容でした。

ドラマに登場する子どもたちの不登校の背景はそれぞれ異なります。しかし、大きな視点で見ると、家庭環境や家族関係が深く影響していることが描かれています。

親たちは「学校に行かせること」だけではなく、「安心して過ごせる居場所」を求める中で、フリースクール「ユカナイ」に出会います。

「ユカナイ」では、子どもたち自身がミーティングを開き、週の予定ややりたいことを自分たちで提案しながら決めていきます。そこには、“管理される場所”ではなく、“自分の気持ちを表現できる場所”としての空間があります。

このドラマが印象的なのは、フリースクールのスタッフが、学校とは異なる立場から子どもや家族に関わっていく点です。
時には家庭の中にも踏み込みながら、既存の支援では取り残されてしまう家族に寄り添おうとする姿が描かれています。

「学校へ行けない子」を一つの型にはめ込まず、
教室が怖い子、
“できる子”でいなければならなかった子、
「嫌だ」と言えなくなった子、
失敗した自分を見られることに耐えられなくなった子――。

それぞれの背景や傷つき方を丁寧に見つめながら支援が始まっていくところに、この作品の誠実さを感じました。

スタッフたちは、「登校」をゴールにする前に、「その子が何に傷ついているのか」を一緒に探していきます。
子どもたちは「ユカナイ」で学校の代わりを探しているのではなく、「怖い」「嫌だ」「好き」「やってみたい」と、自分の気持ちを言葉にできる場所を見つけているように感じました。

ゴールは“学校へ戻すこと”だけではなく、自分らしく安心して過ごせる居場

所を持つことなのかもしれません。

先日 WAM 助成事業の報告会でパネルディスカッションに参加していただいた、市立宮崎小学校の牧野宏紀校長の記事が Yahoo!ニュースに掲載されていました。

記事のテーマは、
『「午前中５時間授業」宮崎市の小学校で進む“学びの多様化”　下校が早まり放課後が充実・先生の働き方にも変化』
という内容でした。

宮崎市内では現在、小学校 46 校のうち 12 校が「午前中５時間授業」を導入しているとのことです。

宮崎小学校では４年前からこの取り組みを始めており、市の教育委員会主導ではなく、学校独自の実践として行われているそうです。
牧野校長は、
「授業時間を少し短くすることで集中力が増す。また、放課後の時間が充実し、教職員も子どもたちのための準備や情報共有の時間を確保できる」
と語られていました。
さらに、
「受け身の学習だけでは楽しくない。学ぶ内容や時間、方法を自分で選び、自分で決める。“学びたい、やってみたいことがある学校に”することが狙い」
という言葉がとても印象的でした。

不登校支援も教育改革も、根底には「子どもを管理する」のではなく、「子ども自身の主体性をどう育てるか」という共通したテーマがあるように感じます。
学校へ行く・行かないだけではなく、
「その子が安心して、自分らしく学び、生きられる環境とは何か」
これからの支援や教育には、その視点がますます求められているのかもしれません。

宮崎小学校の記事：Yahoo!ニュース
https://news.yahoo.co.jp/.../a622f233dce138846a205b496e41...